

日13-95

「永遠の0」★★★★★

2013（平成25）年8月8日鑑賞
<東宝試写室>

監督：山崎貴
原作：百田尚樹『永遠の0』（太田出版刊）
宮部久蔵（熟練のゼロ戦搭乗員）／岡田准一
佐伯健太郎（宮部の孫、司法浪人）／三浦春馬
松乃（宮部の妻、戦後、賢一郎と再婚）／井上真央
井崎（戦時中）（ゼロ戦搭乗員、真珠湾、ミッドウェー、ラバウルで宮部の部下）／濱田岳
井崎（現代）（余命わずかの入院患者）／橋爪功
景浦（戦時中）（宮部をライバル視する熟練パイロット）／新井浩文
景浦（現代）（豪邸に住む謎多き人物）／田中泯
大石（筑波海軍航空隊、予備士官、宮部の教え子）／染谷将太
武田（戦時中）（筑波海軍航空隊、予備士官、宮部の教え子）／三浦貴大
武田（現代）（経済界の大物）／山本學
小山（ゼロ戦搭乗員、ラバウルで宮部の部下）／上田竜也
長谷川（現代）（元・ゼロ戦搭乗員）／平幹二朗
佐伯慶子（健太郎の姉、フリーライター）／吹石一恵
清子（宮部と松乃の娘、健太郎と慶子の母）／風吹ジュン
賢一郎（弁護士、健太郎と慶子の祖父、松乃が再婚した夫）／夏八木勲
2013年・日本映画・144分
配給／東宝

<百田文学の面白さをタップリと！>

百田尚樹といえば、現在『海賊とよばれた男』が、村上春樹の『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』と並んで、各書店に平積みされている人気のベストセラー作家。彼は私が日曜日にいつもフィットネスで運動しながら見ている『たかじんのそこまで言って委員会』にも最近時々出演しているが、そこでの話も結構面白い。『永遠の0』はそんな彼が2006年に発表した小説家としてのデビュー作だが、現在関連本を含め280万部を突破するほど売れているらしい。

7月1日に観た宮崎駿監督の『風立ちぬ』（13年）はゼロ戦の設計者・堀越二郎と小説『風立ちぬ』の作者・堀辰雄をミックスした物語だった。それに対して本作は同じ「ゼロ戦」が大きなテーマだが、ゼロ戦の熟練パイロットである主人公・宮部久蔵（岡田准一）を中心とした壮大な人間ドラマ。『風立ちぬ』の堀越二郎はゼロ戦を設計しただけだが、宮部はレッキとした帝国海軍の軍人であり、熟練のゼロ戦搭乗員。そんな宮部が、軍人でありながら常々「死にたくない」と言っていたというからビックリ。宮部はこれから真珠湾攻撃に向かうとする時にもそんなことを言っていたそうだが、そりゃかなりの勇気がいるのでは？

もっとも、そんな宮部が特攻を志願したのはなぜ？本作は2時間24分の力作で、登場人物も多い。さらに、それが現代パートと戦争中のパートに分かれているから、いかにわかりづらそう。いやいや、そんな心配は全く不要だ。にもかかわらず、本作のストーリーはものすごい興行きがあり、深みがある。なるほど、これがベストセラー作家・百田文学の面白さなのか！思わず、そうひざを叩かざるをえない百田文学の面白さを、本作でタップリと味わいたい。

<祖父探しの糸口は？>

本作は松乃（井上真央）の葬儀のシーンから始まる。その席で松乃の孫である佐伯健太郎（三浦春馬）は、激しく泣き崩れる祖父・賢一郎（夏八木勲）の姿を見てビックリ。さらに、その直後の会食の席で、健太郎は母親の清子（風吹ジュン）、姉の慶子（吹石一恵）から、賢一郎は祖父ではなく、清子の実の父親であり、健太郎の実の祖父は別にいると聞かされ、さらにビックリ。その人の名前は宮部久蔵。

「あの戦争」で特攻を志願し、26歳、つまり今の健太郎と同じ年で戦死したそうだ。

そんなことを聞かせてくれたうえで、現在フリーライターをしている姉の慶子はこの際まとまったルボを書くため、その宮部久蔵の取材をするので、健太郎に手伝ってくれと申し出た。しかし、現在司法試験を4回も落ちている、いわゆる司法浪人中の健太郎はそんなことを頼まれても大迷惑。しかし、バイト料を払ってくれるとなると、話は別だ。そんな軽い気持ちで、健太郎は慶子の実の祖父探しの旅の手伝いを始めたが・・・。

<宮部は海軍一の臆病者！最初は、そんな証言から>

健太郎と慶子が最初の証言者（語り部）として訪れたのは、元・ゼロ戦搭乗員の長谷川（平幹二朗）だ。帝国海軍の①零戦（零式艦上戦闘機）、②艦爆（2人乗りの艦上爆撃機）、③艦攻（3人乗りの艦上攻撃機）のパイロットたちは、1941年12月8日の真珠湾攻撃に向けて猛訓練をくり返していたから、パイロット仲間の連帯感と信頼感は強いはず。そう思っていたのに、長谷川の証言は「宮部は海軍一の臆病者だった」というもので、同じ飛行機乗りとして宮部に強い嫌悪感を示したから、2人は唖然。そんな長谷川の証言を裏付けられるかのように、空母・赤城への離発着訓練をくり返すパイロット仲間の中では、どうも宮部の評判はよくないらしい。それは、宮部は臆病なのに「死にたくない」「生きて帰りたい」と平気で言っているためだ。

あの時代は、子供でも軍人になって国のために死ぬことは名誉なことだと教育されていたから、レッキとしたゼロ戦乗りの男が、自分の命を天皇陛下のため、国のために捧げるのは当然だから、「死にたくない」「生きて帰りたい」などと言う奴は一人もいなかったはず。したがって、宮部の部下として身近にそんな言葉を聞いたゼロ戦搭乗員の井崎（濱田岳）が動揺し、反発したのは当然だ。スクリーン上で展開される宮部のそんな言動を見た観客はもちろん、長谷部の証言を直接聞いた健太郎と慶子の2人も、祖父がそんな軍人だったことを知ってガッカリ。更に調べていくという慶子に対して、健太郎の方は「もうやめたい」とたちまち弱音を吐き始めたが・・・。

<戦いはミッドウェー海戦からガダルカナルへ>

1941年12月8日の真珠湾攻撃の奇襲に大成功した日本軍は大喜びだが、宮部は『聯合艦隊司令長官 山本五十六』（11年）（『シネマルーム28』91頁参照）で観た山本長官と同じように、そこにアメリカの空母がいなかったことが大いに不満らしい。さらに、翌1942年6月5日のミッドウェー海戦では、敵機動部隊の全滅を目的とした作戦であるにもかかわらず、空母を発見できないために雷装から爆装に転換したこと、また「敵機動部隊発見！」の報を受けて再度爆装から雷装に転換しようとしたことに、宮部は猛反発。こりゃたしかに映画としてはわかりやすいが、一介のゼロ戦搭乗員にすぎない宮部にそんな発言をする権限などあるはずないから、このシーンは少し違和感が・・・。

それはともかく、ミッドウェー海戦の敗北によって赤城、加賀、飛龍、蒼龍という虎の子空母4隻を失った日本軍が、その後劣勢に陥ったのは当然。そこで本作が次に描くのが、ラバウル航空隊を基地としたガダルカナル作戦（の一部）だ。ソロモン諸島南東部にあるガダルカナル島は、補給路を断たれ多数の餓死者が出たことから「飢島」とも呼ばれたが、さてその戦いの苛酷さは？

<そんな距離では戦えない！それが現実だが・・・>

今ラバウル航空隊にいる宮部たちに与えられた任務は、ガダルカナル島に向かって飛び立ち、所定の任務を果たした後、再びラバウル航空基地に戻ってくることに。しかし、宮部が地図上にコンパスをあてて距離を測ってみると、いくら航続距離の長いゼロ戦でもそんな長距離の往復は到底ムリ。そこで宮部は「そんな距離では戦えない」と口走ったが、そんな小隊長・宮部の姿勢に部下の小山（上田竜也）と、井崎が反発したのは当然。さらに、これにカチンときた上司からは、宮部に対して鉄拳制裁が。

しかし、現実足数字どおりだから、宮部が心配したとおり、宮部と小山、井崎機は何とか帰路につくことはできたものの、残りのガソリンはごくわずか。特に小山は怪我もしているし、戦闘で多くのガソリンを使ったためか、ついにガス欠によってエンジンが停止してしまっただけで大変。小山は何とか海上に不時着して救援を待ったが、その救援隊が着いた時は不時着地点に飛行機の残骸はなく、フカの群れだったらしい。真珠湾、ミッドウェー、ラバウルと飛つと部下として宮部の間近にいた井崎はこれを見て、「なぜ敵機に突っ込ませなかったのか！」と厳しく宮部を責めたが、宮部は「生きる可能性があるのなら生きろ！」と逆に井崎を説教。

末期ガンのため今は死の床にっている井崎（橋爪功）は、その後やっと宮部の戦い方の意義を理解し、今は宮部に敬意を抱いていることを、健太郎と慶子に伝えたが・・・。

<今の若者たちの合コンのテーマに特攻はムリ？>

法曹養成制度の失敗とりわけ法科大学院と弁護士増員計画の大失敗は今や明らかだが、司法試験に4回も失敗している本作の主人公・健太郎が生きているのは2004年の今、つまり、法科大学院が発足した年だ。したがって、祖父探しの旅は順調に進んでいるようだが、健太郎にとっての法科大学院の受験は？それはともかく、本作に見る健太郎たち男4人が気分転換のために女の子4人と合コンをするシーンは、あまりにも軽すぎてぞっとしてしまう。合コンの席で健太郎が特攻で死んだ祖父のことを調べていると話すと、既に弁護士バツジをつけている健太郎の友人は、特攻＝自爆テロだと主張。たしかにそういう面もあるが、実際には違うんだ。健太郎がそう言えたのは、多少なりとも自分が祖父のことを調べ、特攻のことを調べたからだ。しかし、それに対する男3人女4人の反応は？

もともと、女の子との合コンに特攻というテーマが重すぎるのは当然だが、今健太郎が実際に調べていることをネタにすれば、逆に合コンは盛り上がるのでは・・・？団塊世代の私としてはちょっとそんなことも考えたが、所詮そりゃ無理らしい。およそかみ合わないそんな議論にキレてしまった健太郎は、この合コンでの女の子のグットを諦めて一人飛び出していったが、これは健太郎が悪いの？それとも、男3人女4人の若者たちが悪いの・・・？

<宮部と景浦とのライバル争いは？>

ラバウルから連日のようにゼロ戦が飛び立てて戦ったことは、『聯合艦隊司令長官 山本五十六』を観てもよくわかる。また「さらば、ラバウルよ、また来るまでは～」の歌は今でも有名だ。そんなラバウル航空基地で宮部が出会ったのが、新しくここに赴任してきた景浦（新井浩文）だ。ゼロ戦乗りの醍醐味は、戦闘機同士の空中戦で敵機の背後につけて敵機を撃ち落とすこと。そんな「乱戦」が大好きで、そこに命を賭けている熟練パイロットの景浦は、すぐれた技術を持ちながら乱戦になると「死にたくない」とばかりにその場を立ち去る（逃げ去る）宮部を苦々しく思っていた。ところが、実戦では逃げてばかりの宮部が「模擬空戦」ではすばらしい技術を発揮すると聞き、ある日宮部に対して模擬空戦を挑んだが、さてその展開と結末は・・・？

それはあなた自身の目で確かめてもらう必要があるが、ここでの「敗北」以降景浦は強く宮部を意識するようになり、日本の敗戦直前に宮部が特攻を志願する頃には、景浦はずつと宮部の側から離れない存在になっていた。そして結局、宮部は特攻で死亡したが、宮部の特攻の護衛・戦果確認機として出撃しながら結局宮部を見失ってしまった景浦が、生きて敗戦を迎えることになったのは皮肉だ。

<生き残った景浦の証言は？>

慶子と健太郎は長谷川の次に、今も生き残っている井崎から前述のような貴重な証言を聞くことができ、それによって祖父の宮部を誇りに思えることができたのはラッキーだった。しかして、3番目に2人が聞いた、同じく生き残り組の景浦（田中泯）の証言は？

景浦は最初に2人が訪問した時は、「話すことなど何も無い」と叫んで2人を追い返したが、同級生たちの軽薄な合コンで特攻のことを語って傷ついた健太郎が、2度目に1人で景浦を訪ねてみると・・・？「面構えが少しマシになったか」などと軽口（？）を叩きながら、健太郎一人を前にして重々しく語った景浦の「証言」とは・・・？

<宮部と予備士官・大石との師弟愛は？その1>

日本の敗色濃厚となった昭和20年はじめ、宮部は筑波海軍航空隊に勤務し、学徒出陣で予備士官（少尉）となった若者たちの空戦訓練を担当していた。宮部が教える予備士官たちは、大石（染谷将太）や武田（三浦貴大）、山田（佐々木一平）、伊藤（青木健）、香川（遠藤雄弥）、寺西（柳原楽人）たちだ。しかし、この時期は既に「神風特別攻撃隊」の考え方が確立し、昭和19年10月25日にはフィリピンで神風特別攻撃隊が初戦果をあげて以来、空戦訓練とはいっても実際には特攻のための訓練だったらしい。もっとも、特攻に志願するためには、教官から「可」の成績を貰わなければならないが、宮部教官はいつも「不可」の成績しか与えなかったから、教えた者たちはそれを不満に思っていた。

そんな状況下、ある日の訓練で予備士官の一人が着陸に失敗し、飛行機もろとも死んでしまったから大変。上官は「戦地に赴くまでに、事故で大切な飛行機を潰すとは軍人の風上にも置けない奴！」と死者をボロクソに罵ったが、それに猛然と反論したのが宮部。それまでは、いつも「死にたくない」と言っているらしい、乱戦ではいつも逃げているらしい、等々宮部の悪口ばかりを広めていた予備士官たちも、この日を境に宮部を見直すことに。その結果、ある日アメリカ機に追われている宮部を救うため、大石機がアメリカ機に捨て身の体当たりを敢行！これによって宮部は助かったが、大石は瀕死の大怪我を負うことに。さて、こんな宮部と大石の師弟愛の今後の展開は・・・？

<宮部と予備士官・大石との師弟愛は？その2>

2013年の今年も迎えた8月15日の新聞各紙は、特攻で死んでいった若者たちの姿をいろいろと紹介したが、これは1年に一度だけの行事になってしまっている。しかし、宮部が赴任した鹿屋基地に新たに配属されてきた景浦や大石たちの姿をみれば、あの時代のゼロ戦乗りの若者にとって、特攻がいかに身近な存在であり、かつそれは選択せざるをえない道であったことがよくわかる。宮部や景浦たちベテラン搭乗員は自ら特攻に赴くのではなく、特攻機を援護する「直掩機」に搭乗していた。しかし、景浦はある日、特攻志願者の中に宮部の名前を発見してビックリ！あれほど「死にたくない」と言っていた宮部が、なぜ大石ら予備士官たちと共に特攻に志願を？

宮部と大石は同じ部隊で特攻に赴くことが決まったが、搭乗直前になって宮部は自分が乗っている新型の52型機と大石が乗っている旧型の21型機との交換を希望。その理由は、最後には真珠湾以来愛着のある21型機に乗りたかららしい。そう言われると、大石にはそれを拒否する理由はない。ところが、隊列を組んで飛行していく中、大石が乗る52型機は突然エンジン不良に。ひょっとして、宮部はこの52型機のエンジン不調を知っていたの・・・？こうなりゃ、いくら地団太を踏んでもどこかに不時着するしかなし。敵機動部隊への特攻のために飛行を続ける宮部らと別れ、大石はやむなく不時着。そのおかげで生き残ることができた大石は、終戦後宮部との間に生まれた一人娘・清子と共に今は大阪で極貧生活を送っている松乃の家の前に・・・。

大石が今着ているのは、入院中に、宮部がお見舞としてプレゼントしてくれた外套だが、これは松乃が宮部に着せた大切な外套。そんな外套姿を玄關に見た松乃は、一瞬やっとのことで宮部に戻ってきたのかと錯覚したが・・・。

<思わぬ展開にビックリ！そして感動に涙がボロボロ>

『誰が為に鐘は鳴る』（43年）のクライマックスでは、ゲーリー・クーパー演ずる義勇兵口パートが、ゲリラ部隊とともに逃走していくイングリット・バーグマン演ずるマリアを思い浮かべながら懸命に銃を撃ち続けるラストシーンで心に残っている。そして、次第に薄れていく意識の中で「アメリカのため？いや、でかい。スペインのため？いや、できない。マリアのため？それならできる！」と最後の力を振りしほる姿と、「君は僕だ。僕は君の中に生きている。さよならじゃないんだよ」と心の中で叫ぶシーンが感動的だった。それと同じように、本作のクライマックスで大きな意味をもってくる「宮部語録」は、「私にとって生きて帰る事は何よりも大切な事なのです」と「たとえ死んでも、それでも僕は戻ってくる」というセリフだ。

これは、もちろん物理的には不可能。旧21型機に乗って敵機動部隊に向けて飛ぶ宮部を、直掩機に乗っていた景浦は見失ったのだから、宮部はきつと特攻として散ったはずだ。それに対して、戦後松乃の家を大石が訪問することができたのは、大石機がエンジン不良で不時着したためだ。そこで大石が、宮部と特攻機を交換したことによって自分が生き残ったことを告げるとともに、52型機に残っていた宮部の手紙を松乃に渡すと、その手紙には「松乃と清子をよろしく頼む」と書かれてあった。宮部がこんな手紙を52型機内に残したのは、きつと彼には52型機のエンジントラブルがわかっていたためだろう。

この訪問以降、大石は松乃のために何かと尽くしていくが、それは当初は義務感からくるものだった。しかし、それは次第に喜びに・・・。いや正直に言えば、一目会った時から大石は松乃のことが好きになったのでは・・・？他方、松乃も「たとえ死んでも、それでも僕は戻ってくる」という宮部の言葉の意味は、「宮部は死んでも大石とて戻ってきている」ということだと理解することができたらしい。その結果、2人は・・・？こんな展開に、こんな感動に思わず涙がボロボロ。そして、号泣・・・。

<最後の語り部は？それは健太郎の今の祖父！>

本作冒頭では、母の清子も姉の慶子も祖父・賢一郎が実の父、実の祖父でないことを知っているのに、健太郎だけがそれを知らないことを一瞬アレッ？と思った。また、プレスシートを読んでも、現在弁護士をしている祖父・賢一郎と松乃との関係、健太郎の母親である清子との関係が明確に書かれていないのでアレッ？と思った。しかし、終戦後特攻機の交換によって生き残った大石が松乃と清子の家を訪れ、そこから展開していく物語を見て、なるほど、なるほどと納得。そう、本作冒頭のシーンで松乃を失い泣き崩れていた賢一郎こそ、特攻生き残りの予備士官・大石なのだ。

人間には、また夫婦には必ず何らかの秘密があるもの。松乃を失った賢一郎は、清子にもそして慶子や健太郎たち孫にも自分たち夫婦のことはこれまで全く話さなかったが、本作最後の「語り部」となる賢一郎が最後に語る真実とは？賢一郎役を演じた夏八木勲は現実にも借しまれながら去る5月11日に亡くなったが、彼が本作で語る遺言とも思える言葉はいかに重い。宮部の帰りを待ち続けていた松乃が大石と結婚したのはなぜ？それは松乃が大石を宮部の生まれ変わりと思えることができたため。それほど宮部の松乃に対する思いが強かったわけだ。大石と松乃は、結婚以降宮部のことを一度も口にしたことはないらしい。また同時に、宮部のことを片時も忘れたことがないらしい。そう言いながら賢一郎が孫たちに見せる宮部の手紙の重みは？

「今やっこの事実を語ることができた。我々の世代は、あと10年で死ぬ。この物語は君たちが語り継いでくれ」という賢一郎の言葉はまさに健太郎世代に対する貴重な遺言だ。これは、末期ガンの病床に伏していた井崎が余命3カ月と言われながら6カ月も生きていたのは2人に宮部の話をするためだったんだ、と語った言葉とも重なるものだ。現実にも本作でも、最後の語り部となった夏八木勲演ずる賢一郎の重い重いこの言葉をしっかりと噛みしめたい。

<特攻成功の確率は？悪魔のゼロ戦は？>

特攻（神風特別攻撃隊）を描いた名作は多いが、知覧の特攻基地を舞台とした『ホタル』（01年）はその一つ（『シネマルーム2』34頁参照）。後世まで語り継ぎたい名作だ。ちなみに、特攻は1943年から1944年にかけて陸・海軍双方で検討され、海軍による「神風特別攻撃隊」の初戦果は1944年10月25日だった。そして、当初こそその成功の確率は高かったが、アメリカ艦船の対空砲火の強化もあり、次第にその確率は落ちていった。ネットにみる「藤沢市民ひとりごと会議室」によれば、その艦船命中率は11.6％とされている。

山崎貴監督の本作は『ALWAYS 三丁目の夕日』（05年）（『シネマルーム9』258頁参照）、『ALWAYS 続・三丁目の夕日』（07年）（『シネマルーム16』285頁参照）、『ALWAYS 三丁目の夕日'64』（12年）（『シネマルーム28』142頁参照）と同じように、空母・赤城の勇姿、空中戦のシーン、そして特攻のシーンを見るVFXの映像が美しい。しかし、私たちがテレビでよく見るニュース映像では、敵艦船に当たる前に対空砲火で撃ち落とされるシーンが多い。また本作でも、宮部が特攻を指導した予備士官たちは次々と特攻に赴いたが、そのゼロ戦のほとんどは途中で撃ち落とされていた。しかして、映画冒頭に登場する特攻機は？「悪魔」と呼ばれたこのゼロ戦は、すさまじい対空砲火をくぐり抜けながら敵空母への特攻を敢行していた。

前述した感動のクライマックスは2004年の現代で迎えるが、その後スクリーンは一機の悪魔のゼロ戦がまっすぐ空母に向かって飛行していくシーンに変わる。この男は、一体誰？空母からは雨あられの対空砲火だが、なぜかこの機には全然当たらない。しかして、このゼロ戦による特攻は・・・？